

26. 「こどものケンカはいけないのかな？」

2009年7月1日 社会福祉法人 江刺保育園

幼い子どもたちはよくケンカをします。2歳くらいまでは、おもちゃや大好きな人の取り合いをしますが、子どもたちの意識の中ではケンカということではなく、ただおもちゃが欲しい、好きな人を自分のものだけにしたいという思いだけなのです。しかし、2歳を過ぎると、自分のやりたいとことをはっきりと意識し、自分の意志をかたくなに守ろうとする行動がでてきます。このころの子どもは自分がこの世の中のすべてだと思っていますから、遊びの中で複数の子どもたちが集まれば、かならず何組かがケンカすることになるのです。ケンカは時には髪をひっぱたり、顔をつねったり、はいたりすることになりますが、このケンカはどちらかが泣いてしまえばまずそれで決着がついたことになります。



大人としては、ほとんどの場合、ケンカを事前に止めることはしなくてもよいと思います。決着がついた時点で両者を引き離し、お互いの良くない行動を注意してあげればよいのです。繰り返しますが、このころの子どもたちは、世界は自分が中心で動いていると思っていますから他の人が何を考えどんな気持ちなのか全く分かりません。ただ、このようなケンカを何度も体験し、人はどのようなものであるかを体験的に知るのです。ですから、子どもたちは仲良しになるためにケンカをしているのです。もしケンカもせず、ひとり遊びだけで成長してしまった子どもは大きくなったとき、対人関係で非常に不安感をもつことになると思います。どうすれば、人となかよくお話ができるのか、どうすれば人とうまく付き合うことができるのだろうか悩むことでしょう。だからケンカすることは必要なことなのです。ケンカに遭遇した親の役割として、このケンカはどちらが勝ったとか、負けたとか、どちらが正しく、どちらが間違っているということは大きな問題ではありません。このケンカによって子どもが何を学習したのかを注目して頂きたいと思います。

そして3歳くらいになったらケンカしたことを頭ごなしに叱るより、どうしてケンカになったのか、子どもの何が正しいのか、間違っているのか、相手の何がいけないのかを聞いてあげることが必要です。それはケンカのすぐ後ではなく落ち着きを取り戻した時に、聞いてあげるのである。大人が聞いてあげることによって子ども自身がこのケンカを冷静に分析し、今後のよい友達作りの参考にすることは可能です。子どもの言い分を何も聞かず大人だけの判断で助言するよりは「どうしてケンカになったの?」「ケンカしてどう思ったの?」「あいてはどういうきもちだったのかなあ?」と子どもが自分の心を思い起こすような質問をしてあげるとよいのです。聞いてあげているその時点で正しいと思ったときは賛同し、違うと思ったときは、「それは違うと思うよ」と話してあげればよいと思います。この幼い時期のケンカは、子どもたちにとってこれからの成長に非常に大切な体験であることを私たちは知っておきたいと思います。

〈カレーパン (10 個分)〉

の材料)

ホットケーキミックス 250g
カレー粉 小さじ 1 杯半
人参 20g、玉ねぎ 30g
牛豚合挽肉 30g、カレールー 15g
揚げ油

〈作り方〉

- ① 人参、玉ねぎはみじん切りにする。フライパンで挽肉と一緒にいため、火が通ったらカレールーをいれる。
- ② ケーキミックスとカレー粉を合わせ
水で固さを調節しながら生地をまとめる。
- ③ 生地を 10 等分に分けて平にのばし、①の具を入れて包む
- ④ 油で揚げて出来上がり

